

千葉の空襲の1回目は6月10日。爆弾の被害がものすごく、防空壕にも爆弾が落とされて大勢の人が亡くなった。このときは被災しなかったが、焼けた知人宅に見舞いに行き、その惨状に声を呑んだ。

2度目の空襲7月7日のときは、吾妻町（現在の中央区中央3丁目）の自宅（明治38年創業の漬物佃煮屋さん）で被災した。

■物のない時代

昭和13年3月に千葉高等女学校を卒業、その後、洋裁が好きで文化服装学院に入学した。すでに物が乏しい時代に入っていたので、卒業制作の課題も「リフォーム」。母のちりめんの着物をほどいてカクテルドレスを作った。

戦時中、地元で働いているのは女性ばかり。健康な男性は皆軍隊にとられ、工場も農地も働き手は女だ。洋裁の腕を活かして偕行社（帝国陸軍将校、准士官の親睦・互助・学術研究組織）で、陸軍関係の軍服を縫う仕事をした。

千葉には軍の施設が多く軍都と呼ばれるほどで、軍人が威張っていた。世間に食料が底をついても軍には食料があった。兵隊さんは戦地に行くのだから食べる物くらいはきちんとしてあげるのが当たり前だと思っていた。

戦争が続くと、（品物も無いので）商売の仕入れもできなくなった。しかしうちの店は軍にラッキョウや沢庵などを納めていた関係で、砂糖や塩だけは「軍隊用」の配給を受けていた。空襲の時、砂糖は焼けてしまったが、塩はカマス（むしろで作った袋）だけ焼けて中の塩が山のまま残ったので、まるで

品物を隠匿していたように、近所の人から思われたかもしれない。

食物は戦中も戦後も乏しかった。配給として、腐って形も崩れたようなジャガイモをスコップですくって配られたこともある。本当に物がなかった。ラジオも貴重品で、どこの家でも大切に防空壕に仕舞いこんでいた。しかし我が家には近所の人々がラジオを聴きに集まって来るので、壕にしまうわけにいかず、店に出していたので結局空襲で焼けてしまった。空襲があっても逃げないで火を消せと言われたが、縄を束ねた「火はたき」を水に浸して叩いたくらいで、火事が消せるわけがない。

ある日、知り合いの若い兵隊が訪ねてきた。日立航空機の工場に飛行機を受け取りに来たのだが、部品が揃わず待たされているとのこと。戦争も末期にはそんな話がいくらかあった。その頃は燃料も無く、片道分だけで飛び立っていった。「さよなら」というように翼を振って飛んでいくのを見ると涙が出た。皆、戻らなかった。

■空襲

7月6日の夜は、空襲警報が鳴ったと思ったら、もう飛行機が頭上に来ていた。周囲は昼間のようにまっぴかり。非常時なのに、「花火よりきれい」と思うほどだった。パイロットの顔がはっきり見えるほど近くまでB29が飛んできた。こちらは抵抗することができないから、そんなに低空まで降りて来たのだろう。

平素父から、「逃げるなら海のように水のあるところは行き止まりだからダメだ、山の方へ逃げろ」と言われていたので、本町の方へ向かった。途中で防空壕に入れてもらったが、近くまで燃えてきたので、「ごめんなさい」と言いながらそこも出た。残っていたら蒸し焼きになるところだった。ちょっとした判断が生死を分ける。ハンドバッグをとりに戻ったために死んだという人の話も聞い

た。火の粉で背中が焼けるので、防火用水（汚い水だがそんなことは言っていられなかった）を体にあびながら、ともかくも、父母と3人で今の千葉高の方へ向って逃げた。

■何もかも焼け尽した

その夜はすごい土砂降りになった。一夜明けるとすべてが焼け尽くして何も無い。街が消え、はるか遠くまで見渡せた。火は収まっても地面は余熱でまだ熱く、靴が焦げた。店のあたりに戻ってみると釜が転がっている。木のふたは焼けてなくなっていたが、中を見ると、逃げる前に仕込んでいたご飯（馬鈴薯やサツマイモの皮で嵩を増したもの）が空襲の熱で炊けていた。箸もシャモジも何もない。

焼跡で手づかみでごはんを食べながら、「一夜乞食とはこのこと」と、いつもは気丈な母がポロポロと涙をこぼした。防空壕に酒の瓶が割れずに残っていた。物のない中、物々交換でようやく手に入れた酒である。父は、これを見つけると、ころがっていた欠茶碗を手に飲み始めた。焼け跡でまさにヤケ酒だが、「山本サンは焼け跡で落ち着きはらって酒を飲んでいた」と、いつまでも語り草にされた。

我が家は五右衛門風呂だったので鉄の風呂釜が焼け残った。これをトタンで囲って急ごしらえの風呂になった。近くの水道管から水が出っ放しになっていたの、それを汲み入れ、近所の人たちも皆で入った。焼け野原に木っ端がいくらかあるので、燃料だけは不自由しなかった。一面の焼け野原には草一本なく、アメリカ兵が来ると言う噂もあって、皆が不安だった。ある時ニラを一株持って来てくれた人がいた。その緑色が眩しいほど鮮やかに見えたのを覚えている。

■戦後の闇市

戦後は、収入を得るためにアメリカ人将校の奥さんの洋服などを縫った。五井の知人の家でミシンを借りて縫ったのだが、そこまで行く汽車の切符を買うのが大変な苦勞だった。あらゆる伝手を頼って、なんとか手に入れた。

戦前、外国人だからと差別された人たちがいる。しかし、うちには商売でそんな国の人たちも出入りしていた。父も母も、国柄より人柄で付き合い合っていたのだと思う。そんな付き合いがあったためか、戦後の物のない時にこの人たちから食糧などをずいぶん貰った。ありがたかった。

東京の銀座に闇市があった。海辺に住む知人から海苔を分けてもらい、闇市まで売りにいったこともある。1枚ずつ売った。皆が必死だった。

人は困った時は助け合おうと言うが、ギリギリの暮らしの中では、イヤなところがむき出しになることもある。しばしば「通報」された。呼び出しがくると父は面倒くさくなって、なぜか娘の私が警察に何度も行かされた。

終戦の日、天皇陛下の放送の後、稲毛のアルコール工場までサツマイモのしぼり滓を取りに行かされたことが忘れられない。暑い中、臭いしぼり滓の車を引いて帰ると、途中の大和橋でアメリカの艦載機が飛んできて、橋の欄干に機銃掃射をしかけた。戦争は終わったのに遊び半分に撃つたのだ。戦争に負けると言うのは本当にみじめなことだと思った。しかしあのまま勝っていたら、軍人さんたちが威張って、ろくことは無かったかもしれない。あの日苦勞して運んだしぼり滓は、いったい何に使われたのか今もわからない。

.....

空襲の後、1～2年して元の場所(現中央3丁目)に戻り、漬物佃煮店を再開。その後2005年まで、通算100年間営業したことになる。店は閉じたが現在も同じ所に住んでいる。